

これからの国際協力（2・6・16）

大島 靖（昭10・文乙）

ご紹介を頂きました大島でございます。昭和十年の文乙の卒業でございます。

三高の時分、この辺は毎晩散歩でよく参りましたところで、誠に懐かしい感じで、この度三高会館の方からお招き頂きまして私も喜んで参上致した次第でございます。二年程前に大阪市長を引退致しまして、只今ご紹介頂きましたように大阪国際交流センターという、その会長を勤めております。大阪の上本町六丁目上六の交差点からちょっと南の方で、元の国立の大阪外語大学の跡地でございます。司馬遼太郎先生も大阪外大の卒業、蒙古学科を出ておられますけれど。そこに国際交流センターが出来まして、これが出来ます時に、こちらにいらっしゃいます奥田先生にも大変お世話になったんでございますが、約千人位収容の国際会議場がございます、外国人向けのホテルも経営致しております、いろんな国際会議とか国際シンポジウムとかやっております。又、留学生のお世話も致しております。皆様方大阪へお出ましの節は、ぜひ一度お立ち寄

り賜わりたいと思います。

そういう関係で今日はこれからの国際協力と言うことで、いささか堅苦しいお話で恐縮でございますが、しばらく御清聴お願い致したいと存じます。

昨年の夏、外務省の方から私に最近のアフリカを一度見て来てほしい。又、アフリカに於ける海外青年協力隊員の活動状況を現地で見ても、且つ激励して来てほしいと言うご要請がございました、東アフリカのケニヤ、タンザニア、ルアンダの辺りを回って参りましたが、ケニアは、皆さんご承知の通り赤道直下の国でございます。タンザニアはケニアの直ぐ南でございます、キリマンジャロの山のある国でございます。ルアンダと言うのは非常に小さな国でございます、キリマンジャロから更に奥地、例のマウンテンゴリラの棲息地でございます。昨年の春頃「愛は霧の中に」という映画がございまして、マウンテンゴリラを守って密猟者と戦う婦人の映画でございまして、なかなか評判になった、あの映画のルアンダでございます。

今回アフリカ大陸の現地を見まして、まず第一に感じました事は、「ジャイカ」の海外青年協力隊の活動でございます。ジャイカと申しますのは、外務省の国際協力事業団、ジャパン・インターナショナル・コーポレーション・エイジェンシー、J・I・C・Aと書いてジャイカでございますが、ルアンダのような小さな国でも約三十人の青年協力隊員が奥地まで入り込んで、電灯もついでない、飲料水も毎日2 kmも3 kmも汲みに行かなくちゃいかんというような奥地に住み

込みまして、日本の二十歳代の女性が看護婦をやっている、学校の先生をしておる、そう言う姿を見まして、私もすっかり感動をいたしたのでございます。私が来たというので青年協力隊の諸君ほとんどが村の方から出てまいりまして、いろいろ話を聞かせてくれたんでございますが、下痢が続いて39度も熱が出てひとり寝ておってどうしようかと思つたという話とか、あるいはマラリアで40度も熱が出て朦朧となつたような話、こういう話を彼女達は淡々と私に語ってくれる、こうした苦しみを経験して彼らはぐつとたくましくなつてくるようでございます。

青年協力隊員のやつております仕事も誠に多岐にわたつておりまして、牛の人工受精から農業改良・稲作の指導、果物の品種改良、看護婦でありますとか、小児マヒのリハビリの指導、学校の先生、自動車の修理、電話線の補修、まあいろいろでございますが、総じてその国の政府からも、また国民と申しますか、村の人からも非常に喜ばれかつ親近感を持たれておるようでございます。ルアンダにまいりました時に丁度ルアンダの外務省から電話がございました、青年協力隊のお礼を言いたいから、ということでございます。外務省にまいりましたら丁度、外務大臣はヨーロッパに出張中でしたが、外務次官の方から懇篤なお礼の言葉がございました。

アフリカでは水の問題が大変な問題でございます、首府のあるようなところは別でございますが、ちょっと一歩郊外へ出ますともう遠方まで水を汲みに行かなくちゃならん、しかもそれが毎朝・毎夕の女・子供の大変な仕事でございます。そこへ日本の青年協力隊の大きな井戸掘りの

機械が行つてですね、約一カ月かかるそうでございますけれども、井戸の水が出るようになった時の村の人達の喜びというのは、大変なもの、想像に絶するものがあるそうでございます。

ルアンダの飛行場へ着きました時に同じ飛行機から日本の青年が降りてまいりましたので、「君、ルアンダまで何しに来たんだ」と聞きましたら、「井戸を掘りに来たんです」と、こういふ答えでございました。これは住友商事の社員だと言つておりました。それからケニアのホテルで会いました青年もやはり井戸を掘りに来たと言つておりまして、この青年は九州の男でございました。

一昨年、セネガルの大統領が大阪にお見えになりました。このセネガルというのはアフリカの一番西の端、大西洋岸の国でございます。昔アメリカへ奴隷を送りました積み出し港でございます。例のパリ・ダカールの自動車のラリー、サハラ砂漠を自動車で越して行く国際ラリーがございますが、あのパリ・ダカールのダカールというのがセネガルの首府でございます。サハラ砂漠のすぐ南側でございます。毎年サハラ砂漠がどんどん南下してまいりました。毎年5 km程広がってくるわけでございますが、そこへ日本のジャイカの青年協力隊が派遣されました。緑化の協力をしておるのでございますが、大統領がお見えになりました時に、ひとつ大阪市もセネガルの緑化の応援をして欲しいということで、大阪から約三十人のセネガル緑化応援ツアーを派遣したのであります。

第一次のツアーは、松下電気の労働組合の若い組合員の諸君が出てくれました。第二次は、大学の農学部、農学部の先生がついて出て行ってくださったんですが、現地では大統領以下大変な歓迎であったようです。その人達の報告によりますと、セネガルには国連の手で非常に立派な、壮大な防風林が出来ておる、しかしながらセネガルの国民、村の人達の緑化の意識・植林の意識とは全然関係がない。ところが日本の青年協力隊の諸君は村に入りこんで、村の人達が生活のために木を切つて薪にしておるけれども、木を切つた後には必ず新しい木を植えずなくちやいかんということを村の人達に教えておる。その仕事は誠に小規模、国連の防風林に比べますと比較にならぬ程、小規模でございますけれどもしかし、だんだん、だんだん村の人達に緑化の意識・植林しなくちやいかんという意識が出てきておるようです。こういう風に青年協力隊の仕事は、村に入り込み、村の人達に解け込んでおるようです。

タンザニアでは、はたち過ぎの日本の女性の隊員が、小児マヒのリハビリの指導をしておるのを見たのでございますが、小児マヒの子供を抱いたお母さん達が三十人位その横に座つて順番を待つておる。この女性隊員は、子供から非常に慕われておつて、エンジェル・スマイルと呼ばれておる。そうした姿を見まして、私も本当に涙が出てくるような思いでございました。

今回のアフリカ旅行は、私も、もう七五歳になるものですから、随分疲れて帰ってくるのではないかと思つたんでありますけれども、こうした青年協力隊員の諸君のやつておる仕事、殊にこ

の若い女性がこういう風にやっている仕事を見ましても、私もすっかり感動いたしました、これはもう年のことなど言っておられん、俺も頑張らなくちゃと思っておりますね、今度帰って参ります時に、飛行機から降りましたら、家内が迎えに出ておったのですが、家内は私が相当疲れて帰ってくると思ったら、「あなた若返って帰って来ました。」と言っておりましたが、私もそういう事で、すっかり感動いたしましたのでございます。

ついでにもう一つ皆さんにご報告申し上げたいと思っておりますのは、ケニアの首府のナイロビに参りました時に、たまたまアフリカ大陸をリヤカーをひっぱって、一人で歩いて横断している青年に会ったんでございますけれども、これがたまたま大阪の青年でございまして、高等学校の先生で三十歳くらいの独身の青年でございました。これからさらにキリマンジャロのふもとを通っておりますね、ザイルの奥の密林を越えて、大西洋のところまで出て、そこから北へ向かってサハラ砂漠をまた、リヤカーをひっぱって地中海まで出て、それから帰る。かれこれ一年がかりだと言っておりますが、来年の夏、大阪へ帰りましたらその時また、伺いますと言っております。ひげつつらの非常にたくましい青年でございまして、私が密林の奥なんかで途中で強盗に会うだろうと言いましたら、「ええ、時々出てきますけれども、むこうの方が逃げていきます。」と言っております。この青年、おそらくもうそろそろ大阪に帰ってくる時分だと思えます。近ごろの青年はダメだとよく聞きますけれども、私は今回の旅行で、日本の青年は、まだまだ大丈夫、日本

の将来は大丈夫という感を深く致したのでございます。

それから次に、近ごろ新聞によく出てまいりますけれども、NGOという言葉がございます。ノン・ガバメンタル・オガナイゼイション、民間の活動でございますけれども、政府の国際協力、国際援助も、大切でございますけれども、これからは特に民間の援助活動というものが重要になってまいります。アフリカ大陸では、ヨーロッパ各国のNGOは、相当活発に活動いたしておりますが、日本のNGOはまだまだでございます。これは、もちろん、ヨーロッパの各国はキリスト教の関係もございますし、また、かつて植民地時代の宗主国であったという関係もございます。まして、ヨーロッパ各国のNGOが非常に活発に動いておるんでございます。

フランスにメドサン・サン・フロンティエルという医療の、お医者さんの国際協力団体、これは世界最大の協力組織でございますが、パリに本部がございます。今度帰りにその本部を訪ねて参ったんでありますけれど、非常に大きな組織でございます。各国のお医者さん千数百人を即時にでも動員できる大きな組織でございます。先般も北京の天安門で学生と戒厳軍が衝突いたしましたその翌日には、もう既にパリからこのメドサン・サン・フロンティエルのお医者さんが香港に到着しておった。また、医療の各種の材料が北京に空輸されておったということであります。先般のサンフランシスコの大地震の時にも行ったようでございます。今回のルーマニアの武力衝突の時にも、即時に救援活動を開始しているようでございます。日本の政府援助、ODAという

ものは、今や世界一になってきておりますけれども、NGO、民間の援助活動はまだまだの状態でございます。

イギリスには、オックスフアムという非常に大きなNGOの援助団体がございます。年間、百億円くらいの子算で活動いたしております。また、アメリカには、ケアインターナショナルという、これは世界最大のNGOの援助組織がございます。年間予算は約六百億円と聞いておりますが、今後、日本でもNGO、民間の援助活動が重要になって参りますので、今年の秋に私どもの大阪国際交流センターで、こうした世界各国の大きなNGOの援助組織、イギリス、アメリカ、フランス、その他にもオランダ、ベルギー、カナダのNGOも招待いたしました。日本のNGOとの交流の会議を開催する予定になっております。このNGOの活動というものが、今後、非常に大きな大きな問題になってくると思えます。

それから、次に申し上げたいと思えますのは、こうしたNGOの援助活動と相並んで、これと共に、地方自治体の援助活動というものも、今後ますます重要になってくるようになってございます。アフリカ大陸でもそうでございますが、東南アジアでも開発途上国の人口の増加というものは、大変なものでございますし、殊に、その増加する人口が爆発的に都市に集中してまいる。そこから生じます、いろんな都市問題、住宅の問題、交通の問題、公害の問題、あるいは伝染病の問題、上水道、下水道の問題、こうした都市問題がこれから開発途上国で大変な問題になってくる

わけでございます。

これから21世紀の初めまでに開発途上国の都市の人口増加は、約七億五千万人と言われていきます。開発途上国の都市問題の解決というものが、これからの非常に大きな問題でございます。先年、上海の市長さんから私に、当時、市長をしております時分でございますが、手紙がまいりまして、最近上海も経済活動が非常にさかんになってきて、大気汚染の問題が大問題になってきておるので、ひとつ大阪市の大気汚染防止の技術協力を頼みたいという、こういう手紙が参ったのでございます。そこで私は外務省と話をいたしましたして、外務省の援助資金とそれから、大阪市の公害対策の技術をセットにした技術協力を始めまして、二年がかりで上海市の大気汚染の実状をつぶさに調査いたしましたして、その報告書と今後とるべき政策提言をまとめて上海市の市長さんに提出いたしましたして、市長さんから大変喜ばれたのでございます。この市長さんはその後、北京に移りまして、中央共産党の総書記になりました江沢民さんでございます。

ケニアの首府のナイロビでも大阪市の水道局の技術職員、若い職員がケニア政府の上水道建設計画に参画をして活躍をいたしております。数年前に南米のアルゼンチンで国連の水の会議（ユナイテッド・ネイションズ・ウォーター・コンファランス）という水の会議が開かれまして、現在、開発途上国の人口の5分の3は清浄な飲料水に事欠いている。4分の3の人口は、下水道の恩恵に浴していない。そういうことから、そのために毎年、水が原因の病気で死亡する者が全世

界で後をたたないということで、この際、開発途上国の上下水道を早急に整備しようと、そのために先進国の資金と上下水道の技術を総動員しようという決議が国連総会を通過したのでございます。

百年ほど前に、明治の初めごろの大阪市民の悩みは何と言っても、毎年のように起こる淀川の大洪水、それから飲み水から来る伝染病の猖獗でございました。明治時代の大阪市政はいわば、水との戦いであつたし、この大阪だけじゃなく、日本の各都市もそうであつたんだろうと思います。百年前の明治の初め頃の大阪市民は淀川の水を飲んでおつたんでございます。水屋という商売があつて毎朝、淀川の水を汲んできて、各家に売って歩いてる。水の欲しいお宅は、軒下に水という木の札を掛けておつたそうです。ところが、何しろ下水道ができておりませんから、一旦、大雨が降りますと一面の泥水。それが川に流れ込むわけですから、コレラ・赤痢といった伝染病が猖獗を極めました、明治19年の大阪のコレラ患者一万六千人のうち、一万三千人が死亡したという記録が残っております。そこで上下水道の建設が、急務であるということになって、明治28年に大阪市民は初めて、上水道の水を飲んだのでございます。

こうした百年前の大阪市民の悩み・苦しみというものを現在、東南アジアの人達が悩んでおる。アフリカの人達が苦しんでおるのでございまして、私たち地方自治体は過去百年間にわたつて蓄積して参りました都市工学の技術、上水道・下水道の技術、あるいは伝染病の技術とか、そ

う都市工学の技術をもって、東南アジアやアフリカの、これからの都市問題の解決のために努力して参らなくてはいけない。これが21世紀へかけての日本の地方自治体の大きな責任であろうかと思えます。

それから次に、これも大変大事な問題であろうと痛感いたしましたのでございますが、今、アフリカにはN T Tの若い職員が電話線の架設や補修で、相当多勢海外青年協力隊員になって出ておりますが、タンザニアに参りました時にN T Tの青年協力隊員が私のところに参りまして、「大阪へお帰りになったらぜひとも伝えてほしい。実は先年タンザニアの電話公社、ちょうど日本のN T Tでございますけれども、タンザニアの電話公社の若い職員が技術研修員で大阪に留学した時に相当重い病気にかかった。『その時に大阪の人達に非常に親身の世話をしていた。また完璧な治療をしていた。』もし、ほかの国への留学であったらとてもそまでの親身の世話はしてもらえなかった。』と非常に感謝しておったので、ぜひ大阪に帰ったらこのことを、彼の感謝の気持ちをお伝え願いたい。」こうN T Tの協力隊員が私に切々と語っておりました。

最近留学生問題、円高で留学生に対する学費の補助でありますとか、生活費の補助の問題が出ておりますけど、これも大切なことでございますけど、それだけが問題ではないので、殊に一番切実な問題は、何と申しましても、留学生が病気になった時であります。大阪なら病気になっても安心だ、留学生は気安くお医者さんに見てもらえる、このような留学生の医療体制を完璧に整

備するということが、これから非常に大切であると思います。はるばる日本に子供を送っております国の親御さんにとりましては、留学生の病気は恐らく一番心配な事ではなからうかと思うのであります。

先般、大阪城公園で留学生の運動会を開催いたしました。まあ非常な盛会で、大阪近辺に来ております留学生、38カ国の留学生が約五百人集まって、日本のボランティアの手伝いの青年が約五百人、合計千人。千人の運動会といえますとですね、これは相当お金がかかるんでありますけれど、幸いKDDがスポンサーになってくれました。このKDDが、大阪城の運動会の会場に国際電話を5・6台無料で備え付けてくれました。女子の留学生が、アフリカですか、東南アジアですか、国許へ電話を掛けておつてですね、親御さんと話しておるのか、恋人と話しておるのか、涙を流しながら電話をかけており、こうした温かい心が何よりも大切で、地域社会が温かい心で留学生を包んであげることが大切でございます。

先般、前の中国大使、この方はやはり、三高の卒業生でございますが、中井大使が大阪に来られました時の話によりますと、日中友好子孫々に至るまでの、日中友好と口では言っておるけれども、当時の中井大使が北京に行っておられたころの当時の中国現地の実状というものは、国民感情というものは、決してそんな生易しいものではなかった。そうした難しい中で、日中の国交の正常化ができたのは、唯だ一人の昔の日本への留学生が、日本という国はいい国なんだ、日

本人は暖かい民族だということ強く主張してくれたから、日中の国交の正常化というものができたんだ。その昔の留学生というのが周恩来首相であった。でありますから、これからの日本にとって留学生の問題は実に大きい問題だと痛感した、という中井大使のお話でした。今、日本へ来ております留学生は4万人でございます。アメリカは、34万人の留学生をかかえております。フランスが13万人、ドイツが7万人、イギリスでも4万人でございます。中曾根さんは、21世紀の初めまでに日本へ来る留学生を10万人にしようと提唱されております。

今、大阪の未来像として国際都市、大阪は国際都市になるんだということをよく言われておりますけれども、国際都市とは、具体的にはどういう都市であるか。ビジネスの国際都市であるならば、何と言っても東京でございましょう。外国人が住みよい町というのであるならば、或いは神戸や京都の方が住みよいかもしれない。しからば、大阪の国際都市というのは、一体、具体的にはどういう町をいうのか、ということを考えてみますると、私は大阪が国際都市という場合、これは留学生の住みよい町、殊に東南アジアの留学生の住みよい町であるべきだ、と思うのであります。

千数百年昔、遣唐使の船が、難波津の港から出て多数の留学生が長安の都に学んだのであります。その留学生たちがかえってきてきてその後の日本の文化・政治・経済の基礎を土台を作っていたのでございます。遣唐使というのは、遣唐大使以下大体三百〜五百人ぐらい。これが四隻の

船に分乗致しまして海を渡っていったのでございますが、その中に留学生・留学僧が相当多数おりまして、長安の都でお世話になったのであります。留学僧や留学生の長安での滞在費は、唐の政府の官費支給であったようでございまして、中国の古い書物によりますと、日本の留学生はそのお金を節約して、たくさんの書物を買って、海を越えて帰っていったと、こういうふうに書いてあるそうです。今日、日本の都市は大阪でも、京都でも、神戸でもそうでございますが、やはり、このかつての長安のように、留学生の住みよい町にならなくてはならないのではないかと思うのです。

アフリカについての私の印象の最後として、ご報告申し上げたいと思っておりますことは、今後の国際協力の問題として、地球の環境問題というものが、極めて重大かつ、切実な問題となってきたおることでございます。昨年の九月、東京で地球の環境保全に関する国際会議が開かれました。日本の政府とそれからユネップ、ユネップというのは国連の環境計画機構でございます。ユナイテッド・ネイションズ・エンバイロメント・プログラム、UNEPでユネップといいますが、このユネップという国連の機関の本部は、ケニアのナイロビにございます。私も今後の国際協力の問題として、非常に関心がございましたので、ナイロビでユネップの本部を訪問致したのでございますが、天皇陛下も皇太子の頃、ここを訪問されました記念植樹をされております。

昨年の九月の東京会議は、確か竹下総理の提唱で日本に、東京に招致されたものと思われま

が、開会の劈頭、その時には総理は海部総理でございました。海部総理が地球環境問題のために ODA（政府援助）として、今後三年間に三千億円を出そうという意向を表明して、世界に貢献する日本ということを強調されたのでございます。この東京会議は、三日間の会議の後で東京宣言というのを発表致しております。地球の温暖化の問題、熱帯林の破壊の問題、発展途上国の問題、こうした問題は重大かつ緊急の問題であるが、これを克服していくために新しい技術の開発、それから一層の国際協力、それに、それと共に先進国の生活様式というものをですね、もう一度見直さなくちゃいかん。こういう環境倫理が必要だということを東京宣言で提唱いたしております。

ただ今、大阪で開かれております「花と緑の万博」もですね、単に大阪を花いっぱいにしてよとか、或いは日本の緑をもっと増やそうとか、そういうことではなしにこの万博に集まってくる世界中の御婦人達や子供達が、花と緑を通じて自然と人間との交流をはかる。自然というものを忘れた現在の生活様式をもう一度見直すようになってほしい。又、万博に集まってくる青年達が、地球的な緑の危機というものを、アフリカの砂漠化の問題、或いは北欧の、ヨーロッパの酸性雨の問題、こうした地球的な緑の危機を救うために手を握りあってもらおう。こうした心の万博であってほしいと思います。

日本の政府はここ2、3年間、世界に貢献する日本という姿勢を強調いたしましたして、今年度の

政府開発援助（ODA）も総額ほぼ、一兆五千億円、ドル換算で致しますと、約百億ドルでございます。国内予算としましても、非常な突出予算でございますが、世界的に見ましても、これはもう大変なお金でございます。パリのOECDにダック（開発援助委員会・DAC）という委員会がございます、この委員会が世界各国の政府開発援助を調べまして、その統計・国際比較を毎年発表しておりますが、今、お配り致しました表をご覧いただきますと、第一表のように、日本のODA開発援助の総額は、アメリカに次いで、世界第二位でございますが、百億ドルということになりますと、これはもう、アメリカを越して世界第一位になっておるだろうと思えます。

援助の総額におきましては、誠に堂々たるものでございますが、第二表のGNPとの比較・第三表の国民一人当たりではどうかということになりますと、順位が逆転して参ります。スウェーデン・デンマーク・ノルウェーといった国々は、日本やアメリカやドイツは、もっと援助を増やすべきだ、大国の努力不足だ、ということでは非難致しておりますが、大国は大国の方ですね、いや、大国は中小国と違って、お金のいることも多い。殊に、西側全体の為の防衛費も負担しておるんだ。これは、日本はあまり関係はございません。そういうことで、そう簡単には、いかなのだ、ということ、大国・小国それぞれいろいろ理屈はあるでしょうが、竹下元総理は第2表のGNPの〇・七%ぐらい、ちょうど、フランス程度であります、このぐらいまでは、増やしていきたいという意向を表明されておられます。第4表は援助の内容でございますが、援助には

有償援助と無償援助というものがある。無償援助というのは贈与でありまして返済の必要がない。有償援助の方は、返済の必要のある借款、新聞によく出てくる円借款でございます。この贈与比率が第4表のイギリスやオーストラリアが100%、これは援助が全部贈与でございます。一見、イギリスの100%がよくて、日本の60%が悪くように見えますが、これは必ずしも、そうとは言えないのでございます。日本の政府援助というものは約7割がアジアの諸国でございます。

韓国とかシンガポール、香港、台湾、台湾、こういったところはですね、無償援助、贈与も有り難いけれど、有償でもいいから、なるべくお金をたくさん貰って、それによって経済を発展させていきたい、ということでございます。イギリスのような場合は、ほとんどがアフリカが対象でございますので、どうしても無償援助になる。そういう事情がありますので、一概には言えないのでございますけれども、それにしても、この援助の内容、有償と無償との割合ということがやはり、これからの問題でございます。アフリカ大陸、サハラ砂漠から南の極貧国に対しましても、相当援助を増やしてまいらなくてはならないと思っております。

先般のパリで開かれましたサミットの時も、宇野総理から、このアフリカの極貧国援助について今後積極的にやりたいという態度の表明がございました。政府援助・ODAの総額においては確かに世界一でございますけれども、その援助の内容についてさらに改善を加えていかなければなりませんし、同時にまた、先程申しましたような民間の援助活動、NGOの援助活動というも

のが今後の大きな私どもの課題でございます。一橋大学、かつての東京商大でございますが、この学長をしておられました中山伊知郎教授、もうだいぶん前に亡くなられておりますが近代経済学の泰斗として有名な先生でございます。

この中山先生が勲一等をお受けになりました時に、宮中の午餐会で天皇陛下から、昭和天皇でございませうが、中山先生に「ハーマンカーンという学者が、21世紀には日本がアメリカをしのいで世界第一等の国になると言っておるようだけれども、そういうことは可能であるか」という御下問がございました。突然の御下問でございましたけれども中山先生は「陛下、それは二つの条件ができましたならば可能だと思います。一つは物価対策よろしきをうるること。第二は開発途上国に対する援助、協力というものを、日本の国民全体がこれを恩恵だと考えないで、当然の日本の義務、自分たちの責任だと思ふようになること。この二つの条件が出来ましたなら、21世紀に日本が世界第一等の国になることは可能だと存じます」こうお答え申し上げたそうでございます。これは中山先生から私直接うかがったお話でございます。

第一の条件、物価対策よろしきをうるということは、当時インフレ問題が非常な問題であった頃でございます。しかし私が感動いたしましたのは、第二の条件、開発途上国に対する援助、協力というものを国民の一人一人が当然の義務と考えるようになっていくということ。20年も前におっしゃったということは、やはり中山先生の非常な卓見だと思います。私たちが自分

の幸せのために一生懸命努力をする、家族の幸福のために一生懸命働くということは、これはもう当然のことでございますけれども、しかしながら少しでも余力があれば恵まれない人のために尽くしたいと思う。手足の不自由な子供達や寝たきりのお年寄りのために、少しでもお役に立ちたいと思う。或いはまたアフリカへ毛布を送りたいと思う。そうした公共の心というものが、私達の人生にとって一番大切だと思っております。

ちょうど時間になりましたので、私のお話はこれで終らせていただきますが、大変固苦しいお話で恐縮千万でございましたが、御清聴、誠にありがとうございました。

(前大阪市長・財大阪国際交流センター会長)